

安部公房の読者のための通信 世界を变形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊

もぐら通信

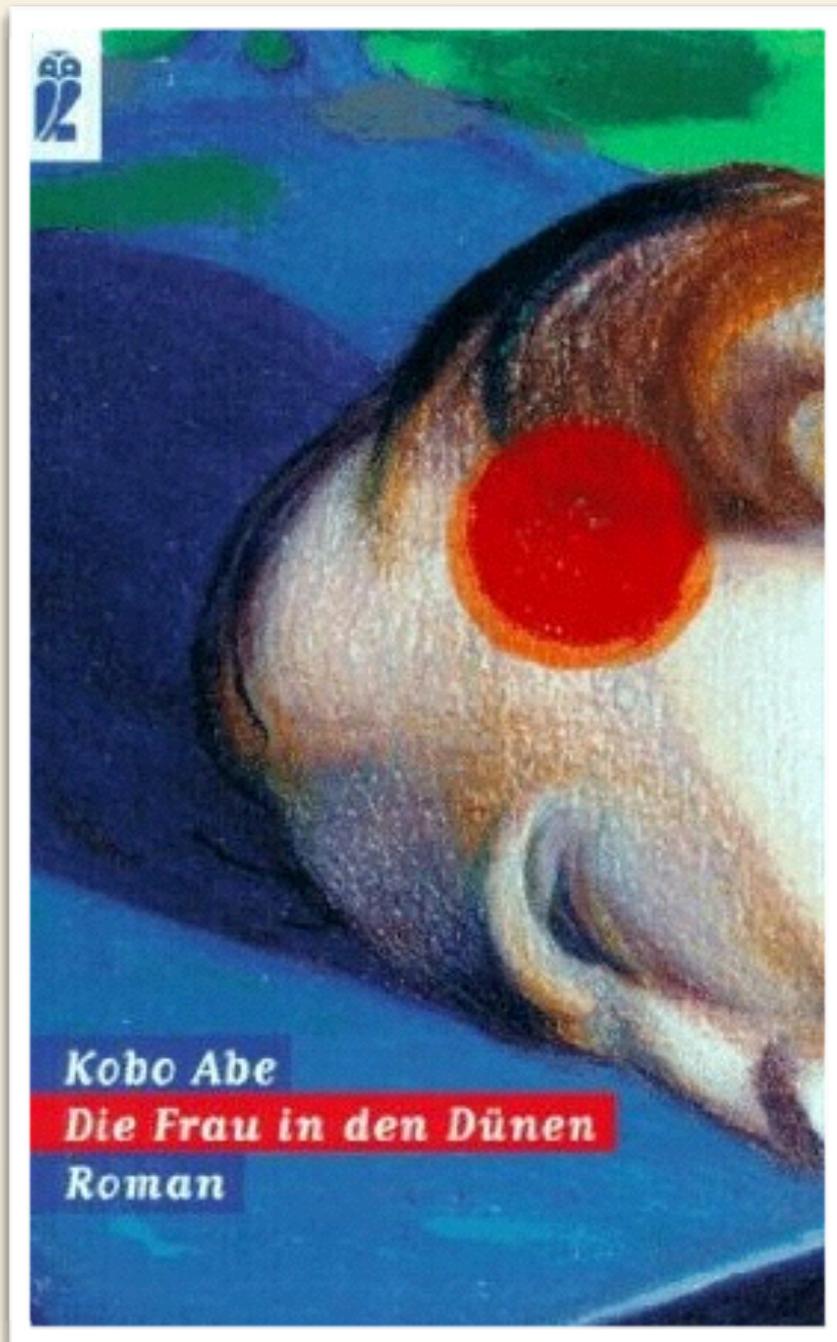
Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2014年5月31日初版 同年6月1日第二版 第21号

www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい



ドイツ語版『砂の女』

安部公房の広場 | ciya.iwata@gmail.com | www.abekobosplace.blogspot.jp

ニュース & 記録

(<http://seesaawiki.jp/w6allen/>)

池田龍雄先生の新聞連載

安部公房の朋友で、画家の池田龍雄先生の記事「わたしの百物語」が西日本新聞で4月15日より連載されています。

<http://c.nishinippon.co.jp/announce/2014/04/post-296.html>

目次

- 1。ニュース&記録…page 2
- 2。目次…page 3
- 3。作家と万年筆 安部公房の巻：荒木堅固…page 4
- 4。安部公房の書棚 『鉛の夜』の闇：稲垣健…page 9
- 5。安部公房邸解体前・解体後…page 11
- 6。私の本棚より：『九大日文』：wlallen…page 19
- 7。安部公房の俳句論：岩田英哉…page 21
- 8。もぐら通信の編集部員を募集します…page 31
- 9。ご寄稿に際してのお願い…page 33
- 10。前号訂正箇所…page 34
- 11。読者からの感想…page 35
- 12。合評会…page 38
- 13。本誌の主な献呈送付先…page…38
- 14。本誌の収蔵機関…page 38
- 15。編集方針…page 38
- 16。個人情報保護方針…page 38
- 17。バックナンバー…page 38
- 18。もぐら通信のwiki…page 38
- 19。第二版訂正箇所… page 39
- 20。編集者短信…page 40
- 21。編集後記…page 41
- 22。次号予告… page 41

お知らせ：電子媒体(PDF)で閲覧されている場合、ツールバーにページ数を入力して検索すると、恰もジャンプ・シューズを履いたかのように、そのページにジャンプします。

作家と万年筆 安部公房の巻 ” 遺品展 ” で再会した ザ万年筆三七七六

荒木堅固

[1998年1月6日から2月15日まで、東京調布市の文化会館たづくり1階展示室で開催された、安部公房没後5年目の催事に当たり、安部公房の警咳に接した荒木堅固さんが当時、1998年8月号の雑誌「フェンテ」に書かれた記事の再録を御許し下さいましたので、読者にお届けします。]

一、起の章

きょうはザ・万年筆三七七六にまつわるお話をいたします。

このペンはもうご存知のことと思いますが、万年筆博士を認じコレクターとして知られたシナリオ作家故梅田晴夫氏の企画参加により生まれた（ヘビーライター用に、数々のコレクションの経験を元に、重量・太さ・形を最も書き易く疲れないよう配慮、）プラチナが満を持して製作し発売（一九七八・昭和五十三）した万年筆です。

事実、命名されたザ・万年筆は明らかに、オノト・ザ・ペンを意識し、ニブの#三七七六の刻印は日本の霊峰富士山の標高で、これはモンブラン#四八一〇に対抗したもの。また滑り止めのギャザーはこれまたウォーターマン百年ペンを想起させるなど、従来の国産万年筆のイメージを塗り変えた”太軸ヘビー級クラシックタイプ”のペンとして誕生したものです。さすがにコレクターとして実作家としてペンを愛する梅田氏のアドバイスを得たものだと、賞賛を浴びたものでした。その証拠には、その後の国産万年筆が、大小の差はあれこの太軸クラシックタイプの輩出を促した最初の本の一本のひとつになったことでも窺い知れることでしょう。

さてこれからお話することが、この三七七六と作家・安部公房氏と私の関わりについてと言うことなのです。

二、承の章

安部公房と言えば名作「砂の女」「他人の顔」「燃えつきた地図」から「方舟 さくら丸」の純文学作品、「幽霊はここにいる」や「友達」「ウエー」といった演劇のシナリオと演出まで（とくに安部スタジオを主宰し世界各国に巡業、注目された）、さらには「第四間氷期」「人間そっくり」などSF作品と多くの作品を残した前衛作家。そしてノーベル賞候補にも度々のぼりながら一九九三（平成五）年惜しくも急逝された国際的な作家でした。

その偉業を讃え大々的な「安部公房展」が開催されたのは没後5年の春のことでした。一九五九年からの後半生を棲家とされた調布市が主催、新潮社の協力で市の文化会館で催された”公房展”は、映画・ビデオ上映、講演会と展示会で構成され、とくに展示は氏の未発表原稿、自筆ノート、写真作品、愛用の遺品をはじめ、氏の作品の装幀、カット絵、演劇の舞台装置など担当された美術家の真知夫人の作品も併せ展示されるといった、「日本で初公開の遺品」展とあって、連日多数の参会者、展覧者で盛況を極め、会期も当初予定を延長、一ヶ月半に及ぶことになったのです。

私も会期中、数回にわたって訪れました。というのも「遺品」の中の愛用の万年筆コーナーで懐かしい一本のペンが目にとまったからです。大抵作家展には愛用の万年筆が陳列されており、それはそれで興味を惹くのですが、今回ばかりはとりわけ感慨の念を深くしたのです。そのペンはモンブラン、ペリカンに混じって展示されていたザ・万年筆の三七七六だったのです。といいますのは、実はこのペンは私が氏に進呈したものだったからです。なんと十数年ぶりの再会（再見）となったのです。まったくこの時は「生き別れの親兄弟に巡り会った」一私にそんな経験はないのですが、きっとこんな気持ちではないでしょうか。私はふるえる手でシャッターを切っていたのです（撮影禁止にも拘らず夢中でした）。

三、転の章

そこでまず、ここでは如何にして安部氏と私、そして万年筆が結びついたのかを、語っておく必要があると思います。少時お付き合い下さい。

最初に安部文学に惹かれたのは、学生時代「他人の顔」を読んだ時でした。これまでの自然主義の文学（＝私小説）とは全く異なった小説に驚がくしたのでした。その頃氏は、すでに「砂の女」（昭三七）も発表、一部では評価されておりましたが、その映画化～カンヌ映画賞を受け、原作者よりも勅使河原監督や出演者の岸田今日子などに話題が集まり、早く「壁」で芥川賞を受賞しながら、安部公房の名は”全国区”には届きませんでした。

その後も前記「他人の顔」や「砂漠の思想」と作品発表はありましたが、いわゆる大出版社も余り興味は示さなかったと思います。丁度その頃、我々”公房研究者仲間”の五～六人が同好の士として「安部公房をもっと広く知らしめよう」と度々集まり、種々の企画など持ち寄り討議、一方では純文学出版社を編集知人をツテに回ったりしました。

その成果は「新稿終りし道の標べに」（冬樹社）「現代文学の実験室・ラジオドラマ集」（大光社）「公房文学辞典」（VIC）の発行と徐々に実を結んできたのです。続いてこの”拡販”戦術は、仲間が各々社会に出てからも「安部スタジオ・七年の歩み」（創林社）「映画シナリオ撰」（同）と地道な努力がつづき、ついに新潮社での「全作品」（昭和四七～四八、一五巻）発刊を促し、また現在も没後四年めから「安部公房全集・全二九巻」の刊行までつながったのです。（現在この編集に当たっているのは当時の研究仲間のひとりであること、そのほか皆が何らかの形で安部作品出版や催しに参画していることでも証明されます）。

ところで私も当時そのひとりとして（もっとも私は今で言う、”安部フリーク”）広報宣伝役として駆け回っておりました。他方、初期作品集「夢の逃亡」（徳間書店）の書評を東京新聞に掲載されたことが同文化部長氏と安部公房氏の知る所となり、この辺から安部氏との交流、師事が本格的に始まったのでした。しばしば公房氏邸を訪れ、作品集や著書（署名本）を頂いたり、また安部スタジオ旗揚げから会員参加したり、氏の演劇や真知夫人の舞台装置する新劇の招待券をいただいたり試写会に招かれたり、するようになっていったのです。

四、結の章

このような交流の中で、公房師（我々仲間では弘法大師に因み”公房師”と呼んだ）原稿執筆用にと、そのほか色々と頂いたお礼の意も含めて贈った万年筆が、その三七七六であったのです。なぜ国産もので、”舶来ペン”ではなかったのかと言いますと、ひとつには”一本位は国産ものを使ってみてはどうですか”

といった、いたずら心もあったのです。

公房師はご存知のように東大医学部の出身で、卒業したら医者か数学者になろうか、という”理工系”の作家。それだけに機材に強く、またモダンな一面を持っておられた。したがってカメラならライカ、コンタックス、ミノックスといったドイツ製を好みシンセサイザーは玄人はだし（自作劇の主題歌やBGMなど作曲もされた）。またワープロも戦後派作家としては早々に取入れ「方舟さくら丸」（昭五九）以降はすべて原稿はワープロで書かれた？一死後フロッピーで発見された作品も出ている一。したがって万年筆も最初のころからモンブランやペリカンのドイツ製など舶来ものが主力の筆記用具であった。そのため故意にプラチナ三七七六を贈ったものです。

ただ前記のように昭五〇年代後半からワープロに転じられたため原稿もすべてペンからワープロに変わったのは私としては寂しい思いでした。しかし赤字（校正～再校）や書き込みはその後も万年筆で、また署名用にもペン（またはマジック）を使っておられた。実際、私の手元に唯一残っています「映画シナリオ集」の原稿は、本文ワープロ打ちにペンによる直しや書き込みで一杯の”原稿”です。

というわけで公房師と、そして同年に後を追うように逝かれた真知夫人の死は大きなショックとして残りましたが、それから五年の歳月を経て、ようやく「公房展」の開催もあって久々に例の仲間が集まり安部夫妻をしのび、また冥福を改めて祈ったのでした。私としては「遺品展」での再会（再見）もあり、奇妙な巡り合わせに感慨はひとしお。最終日のあと、新潮社公房全集室の友人と、その夜は静かに飲み、語り明かしたのでした。





ご寄稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたのご寄稿をお待ちしております。

安部公房についての、どんな文章でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、下記のメールアドレス宛にご連絡下さい。



次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

安部公房の書棚 『鉛の夜』の闇

稲垣 健

「もぐら通信19号」で岩田氏が報告している作家の書棚の写真展に、私も3月に行きました。もちろん、目的は安部公房の本棚でしたが、生前の「生きた本棚」ではなく、おそらくは仙川の家を取り壊す直前に撮影したものでしょう、なんとなく寄せ集められた感があり、少しがっかりしました。

しかし、資本論やニーチェ全集などがあるべくしてあるかのように並んでいるなか、ひと際、私の眼を引いたのは、ハンス・ヘニー・ヤーンの『鉛の夜』でした。

私の手元にある翻訳は現代思潮社から刊行された初版です。ホモセクシャルな内容で、なんとも陰鬱で逃げ場のない作品です。ひたすら闇、そして、最後は血と汚穢にまみれたまま闇の中でさらに深い闇に包まれた棺のような穴に若い男の死体と重なりあって閉じられてしまう。気分が悪くなる作品ですが、黒く固まりかけた血のような世界をここまで書ける作家の表現力はすさまじい。それにしても、読後感、やりきれない気持ちに襲われる作品で、一度読んだら、詳細な筋は忘れても、そこで体験した世界は決して忘れられない。とんでもない作品です。

この『鉛の夜』の翻訳は今では絶版となっています。『岸边なき流れ』は国書刊行会から高価な翻訳が出ているくらいで、この作家については、ドイツ語圏あるいはヨーロッパ圏では、カフカやブロッホと並んで高く評価されているにも拘わらず、今の日本では、一般にはほとんど知られていないと言ってよいでしょう。

さて、安部公房の書棚にあった『鉛の夜』が眼に入り、同時に、かつて私がこの本を読んだときのあの世界がその場に蘇りました。そして「これは！」とつい言葉が漏れました。

「これは、『終りし道の標べに』の闇だ！」と。

帰りの地下鉄の窓外の薄闇を見ながら「ヤーンの表現力は天才的と言われるが、即物的で、安部公房に共通するところがあるのではないか」など、頭の中をいろいろな想念が駆け巡りつつ、一方で、地下鉄の走るゴーという音が、安部公房のあの「闇」の唸り声のように聞こえ、思わず耳を塞いでしまいました。



安部公房邸解体前・解体後

編集部

今号にご寄稿戴いた荒木堅固さんのご好意により、同氏が撮影なされた安部公房邸解体前と解体後の写真をそれぞれ示して、歴史的な記録として、読者のみなさんにお伝え致します。

解体前の写真は、2014年2月に、解体後の写真は、2014年3月に撮影されたものです。

解体前









解体後









私の本棚より



[ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。]

『九大日文』

wlallen

九州大学の大場健司様から、九州大学日本語文学会発行の「九大日文」という文芸誌を21号から23号まで献本頂きました。なかなか、学術誌まで手が回りませんので、非常に有難い申し出でした。

21号は、大場さんによる苅部直著『安部公房の都市』の書評。

22号は、大場さんによる上野俊哉著『思想の不良たちー1950年代もう一つの精神史』の書評。

23号が、大場さんの論文で、“安部公房『燃えつきた地図』とナサニエル・ホーソーン「ウェイクフィールド」”です。内容は世界文学から見た「燃えつきた地図」論です。

ポール・オースターのニューヨーク3部作が、安部公房の『燃えつきた地図』に影響を受けているという話は聞いたことがありますが、本稿はその点を深く掘り下げ、さらにサニエル・ホーソーンの「ウェイクフィールド」（1837）まで遡って、議論されています。

「ウェイクフィールド」は、20年以上失踪している夫が、実は隣町のアパートから妻を見張っていたという筋立てです。この作品をめぐる作家や評論家の言葉が、コンパクトにまとまっています。

また、異孝之先生の「メタフィクションの謀略」でも、安部公房とポール・オースターとの関係・対比が取り上げられており、本稿においても参考文献として挙げられています。

オースターのニューヨーク3部作と「燃えつきた地図」との類似性は見逃さないように、様々な方が指摘し、オースター自身もその影響を認めているとのこと。本論は、ホーソンー安部ーオースターの系譜を丹念にたどった、非常に中身の濃い議論で、「燃えつきた地図」論を目指す人々の羅針盤になることだと思います。また、日本文学の枠を出て、世界文学の文脈で論じられる安部の小説の魅力を再認識させられました。

本誌を閲覧したい方は、まず、大学図書館検索CiNii Booksで所蔵館を検索してみてください。大学によっては、学外者でも閲覧できるところもあります。

ご献呈いただいた大場様に改めて深く感謝いたします。



安部公房の俳句論

岩田英哉

安部公房はドナルド・キーン先生を誘って、伊豆半島は宇佐美なる吉長という料理屋、或いは割烹というべきでしょうか、この店に誘って、楽しいときを幾度も過ごしております。吉長の当時のチラシというのでしょうか、或いは店の内において、顧客に次回の来店を願った案内なののでしょうか、次の様な写真を見つけました。



さて、この店の亭主の求めに応じて、安部公房が揮毫し、店内に飾ってあった色紙の写真を見る機会がありました。そこには、次の様な、これは俳句というべき言葉が書かれてありましたので、まづはこれをお目にかけてから本題に入りたいと思います。安部公房の色紙は色紙としてまた別にあるわけですが、しかし、その風情をそのまま移した上の写真をこれもそのまま引用しつつ、安部公房の言葉を尋ねると、それは、

山を越えて吉長を食べに来る

というものです。



写真をみますと、吉長を、という文字は、色紙の右下に身を小さく無理にその角に押し込めたように書かれていて、色紙の写真をみせて下さった方によれば、これはあとで、吉長の亭主に言われて店の名前を入れてくれといわれ、安部公房が追記したものだとのことでした。確かにそのように見え、そうすると、本来の句は、

山を越えて食べに来る

ということになります。

これは、日本語の持つ特質、特性に従って、安部公房の散文作品の文体とは全く別に、実に、山頭火の句のような、自由律の俳句の趣があります。

ちなみに、同じ席で書かれたとおぼしきキーン先生の色紙には、次の句があり、おかしなことですが、当時まだアメリカ人のキーン先生の方が、安部公房の句よりもずっと俳句になっております。キーン先生の句は、

初春や吉日めでて長く飲む 昭和五十七年正月

キーン先生らしく、吉長という店の名前に、初春の吉日の吉も掛詞にして、親しき友、安部公房と飲む、正月の長閑（のどか）な、いい時間を、この店の名前と共に、言わば、言祝（ことほ）いでおります。

昭和五十七年正月は、グレゴリウス歴1982年、安部公房32歳です。

確かに、安部公房とキーン先生のお付き合いは、キーン先生曰く、「長いつきあいで、本当に親しかった」のです(贗月報。安部公房全集第25巻)。

さて、安部公房が俳句という藝術をどのように考えていたかをみることにします。

安部公房が俳句という、確かに明治時代に正岡子規によって新らしくされた、それまでの、元禄時代に松尾芭蕉の完成した俳諧ではなく、俳句という一行詩の形式を持つ、とはいえ、その由縁を連歌にまで遡る伝統に連なるこの藝術について、どのように考えたかは、興味のあるところです。

安部公房という人は、物事を本質的に、即ち時間を捨象して構造的にみるので、どの年齢のときの発言であっても、時間の影響を受けることなく、即ち変化することがない。或いは別のいい方をすれば、語彙は替わっていても、その当の言葉に対する概念とその認識に変わりはないのです。これが、安部公房という藝術家です。

安部公房は、『作者への叛逆一誓子小論』という俳句論を書いております(全集第3巻、333ページ)。1952年、安部公房、28歳。

しかし、この直截な俳句論を読む前に、安部公房が芭蕉をどのように考えていたかをみることにしましょう。

「人間・共同体・芸術」と題した磯田光一との対談で、安部公房は次のように発言しています(全集第23巻、391ページ下段)。1972年、安部公房48歳です。

「安部 芭蕉というのもやぼ(原文傍点)だね。ぼくはこのごろ芭蕉というのがおもしろくて、何がおもしろいのだろうと思うと、やっぱり「やぼ」なんだな。

磯田 芭蕉論を書いて下さいよ。みんなビックリしますよ。」

ここで、安部公房が言っている「やぼ」、即ち野暮とはどのようなことなのかを、この発言の前段を読むと知る事ができます。この芭蕉の俳句への理解をみ

てから、若年の俳句論に踏み入ってみましょう。読者は、安部公房のものの考え方、ものの見方に全く首尾一貫性のあるのを見て、驚くことでしょう。

安部公房は、上の発言の前段で、田舎臭さ、野暮ったさのある芸術家として、ショパン、シェイクスピア、ドストエフスキーの名を挙げていて、そうして、これらの芸術家は「深く」ないのだ、そしてそれ故にその作品には普遍性があるのだといい、何故なら、これらの芸術家には田舎性があり、野暮な由縁だからといい、その根拠を、次のように述べているのです。

[註1] この「深く」ないという言い方には、後年のクレオール論と同根の思想が反映しております。従いまた、ジーンズやコーラを論じたかった筈の安部公房のアメリカ論にそのまま通じております。安部公房の発想と感覚(センス)は、その年齢を問わず、いつも単一であり、変わりません。

「安部 だいたいにおいて、専門家は過去を振り返る。しかし受け手のほうは、つねに「今」なんだよ。歴史ではない。人間のいちばん基礎になっている、たとえば歩くとき一二本足で人間は歩くから一ひとつのリズムができる。またたきするときに、目がかわいてきたら目を閉じるという、反射がある。そういう、非常に基本的な人間の生理を基礎にして、あるリズムが生まれて来る。そのリズムというものは時間の感覚をつくりだす。きわめて素朴なことだね。そういう素朴なところに触れなかったら、芸術は成り立たない。だからどうしても、ちょっとやぼ(原文は傍点)じゃなくちゃいけない。いなかくささって、「やぼ」ということだな。」

この発言を読みますと、やはり10代の後半で至った安部公房の実存の概念に戻って発言しているということがわかります。

安部公房が「深く」はないことが普遍性を獲得するといっていること、そして「つねに「今」なんだよ。歴史ではない。」という言葉を読むと、そのことが判ります。安部公房にとっては、いつも言葉を発し、また藝術の様式を問わず、何かを変換して表すその最初の場所は、その人間が今ここにこうしてあるということ、即ちその人間の現存在(das Dasein)の在り方であり、更に言葉を変えて言えば、未分化の実存なのです。

[註2] 安部公房が10代で理解した、安部公房独自の実存という概念について、後年『錨なき方舟の時代』という対談で、安部公房は次のように述べています(全集第27巻、167ページ 下段)。1984年。安部公房、60歳。

「—安部さんが戦中、ハイデッガーとかヤスパースとか、そういうものを非常に熱中してお読みになったということと、文学へ進んでいくこととは関わりがありますか。

安部 あったと思う。実存は本質に先行するという実存主義の基本概念、本質というの一つの規定観念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方、それがなぜぼくにとってそれほど重要な思想だったかということ、やはり戦争中だったからだと思う。」

この、実存とは未分化の状態であるという考えは、安部公房の独自の実存の考えです。

つまり、安部公房が芭蕉を野暮だという意味は、松尾芭蕉という俳諧の詩人は、その人間の実存、即ち未分化の状態から言葉を発して、様式化した人間だということの意味しています。

そうして、自分自身の今ここに在る身体を基準にして、その生理的な感覚と、それが現実的な対象に反応して生まれる「時間の感覚」に基づいて、藝術を成立させること。これは、素朴な行為であり、従い野暮なのだという、安部公房の考えです。(これは、このまま安部公房の演技論の中核概念である、ニュートラルに通用する概念です。)

ここで述べている「時間の感覚」は、当然周期といい、リズムといい、言語藝術の詩の世界では、韻律を踏むということに至ります。この韻律のことを、安部公房は、リズムと言っているわけです。

『反劇的人間』というドナルド・キーン先生との対談があります(全集第24巻、246ページ)。その271ページ下段で、安部公房は、この実存から生まれる「時間の感覚」について、次のように言っています。1973年、安部公房49歳。安部公房は、韻律、即ちリズムのことを、ここでは余韻という韻として論じておられます。

「安部 俳句などは、ものによってはたしかにそうとう複雑な余韻ということがあり得る。言っている本人が全部はよくわかっていないような場合が充分あるわけですね。」

これに対して、キーン先生は、次のように答えています。この回答もまた、安部公房の俳句論を読むには、必要な言葉ですので、少し長いのですが、引用致します。

「キーン 松尾芭蕉は、俳句は不完全なところがなくてはいけない、句というものは解釈であるというようなことを言っていますね。いま安部さんのおっしゃったことに関係があるいい例が『去来抄』にあります。

岩鼻やこゝにもひとり月の客

この弟子の去来の句について芭蕉が「汝、此句をいかにおもひて作せるや」と尋ねます。去来は「こゝにもひとり」というのを、自分以外にも美しい月に 浮かれて岩の端に出て眺めている人がいた、そういうつもりで作った、と答えるのですが、芭蕉はそれでは月なみで面白くない、「己(おのれ)と名乗り出たらんこそ、幾ばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし」。いろいろ月を眺めている人はいるだろうが、「ここにひとり私がいる」という具合に、自分が月に向って名乗り出る一人称の句と解釈した方がずっといい。芭蕉は「自分はそう解釈してとてもよい句だと思ったのだ」と言ったので、去来が「なるほど」とうなったという話です。つまり句を作った去来よりも芭蕉の方がずっと味わい方が深かったわけで、十七文字の不完全さが非常に深い想像力を生んだことになります。」

これは、俳諧の余韻、またその一句の余韻に関する話です。このやりとりの直前に、安部公房は、ハロルド・ピンターという劇作家の作品の余韻のことを論じて、余韻には、次のふたつがあると言っています。

- (1)余韻という響き、それが情緒になる場合
- (2)余韻という響き、「それが情緒ではなくて、もっと深いもののなかに入っていく」ことになる場合

この二つです。

このところの二人の会話から、ふたりの至った結論は、余韻というものは、

日本的な和歌のような藝術にだけ特殊なものなのではなく、ヨーロッパの近代の文学にもあるのだという結論に至ります。

このように議論をして来た上での、安部公房の「俳句などは、ものによってはたしかにさうとう複雑な余韻ということがあり得る。」という発言なのです。

さて、以上のように俳句と余韻ということについての安部公房の発言をみた上で、若年の俳句論『作者への叛逆—誓子小論』を見てみましょう。この俳句論は、1952年、安部公房26歳のものです（全集第3巻、333ページ）。

この小論を読むと、山口誓子という俳人が安部公房を名指しで、自分の俳句を論じて欲しいと指名をしたことがわかります。何故山口誓子という、これも俳句の文学史上に名前の残る俳人が、安部公房を指名して、わが俳句を論ぜよといったものか、面白いものを感じます。一般的な推測では、この若い小説家ならば自分の俳句を理解してくれると思ったものか、或いはまた自分の俳句の全く予期しない面を指摘してくれるかと思ったのか、このふたつのいずれかからではないでしょうか。

安部公房の読み方は、自分は俳句など全く門外漢なのであるから、この俳人の句集をテキストとして読んで、他の一切を顧みないという読み方をすると述べています。さて、そうだとすると、安部公房は、山口誓子の俳句に、つぎの二つの傾向があると断じています。

- (1) 「一つは、作者と対象との函数関係をえがいたもの」
- (2) 「いま一つはオブジェとして対象の切片を切りだしたもの」

この二つです。

そうして、「前者は俳句の伝統的な方法であり、後者は誓子氏に固有な、あるいは誓子氏が切開いた独特の方法ではなかったかと思う」と述べております。

前者、即ち俳句を「物と作者（人間一般ではなく）の函数と見る見方では、かならずその函数式のどこかに空白のまま埋められていない（？）が」と述べている、その函数関係を、次の式で表しています。

$$Y=F(X+?)$$

更に続けて曰く、「その(?)を余情とって、読者がパズルを解くようにその(?)を埋めることを鑑賞というらしい」と付言しております。

これは、上のキーン先生との対談で発言している「余韻という響き、それが情緒になる場合」に相当していることは、言うまでもありません。

しかし、また従い、安部公房は、山口誓子の俳句の特色は「余韻という響き、「それが情緒ではなくて、もっと深いもののなかに入っていくかに」による場合」に相当すると考えているのです。

安部公房によれば、前者の「余韻という響き、それが情緒になる場合」には、作者の発生を社会的にとらえれば、それは「作者」になりたいという憧れにあるといい、それを「『作者』への脱出」と呼んでいて、脱出だという言葉の選択が実に安部公房らしい。また従い、その作者と呼ばれる人間もまた、既にある人間のあり方ではなく、理想のあるべき姿の人間であるということも、安部公房らしいと思います。

さて、山口誓子の俳句の独自性は、後者、即ち「それ（余韻）が情緒ではなくて、もっと深いもののなかに入っていく」ことにあるということ、この俳句論で、安部公房は次のように語っています。

「誓子氏の句は、おびただしく拡大された素材と、新鮮な言葉と、そしてなによりもしばしばほとんど『作者』を抹殺してしまうことで、いわゆる俳句的なものへの叛逆を示しているように思われました。この面を、わたしが第二の方法としてあげたオブジェの方法と呼びたいと思います。」

「オブジェの方法」とは、「オブジェとして対象の切片を切りだしたもの」であり、「それ（余韻）が情緒ではなくて、もっと深いもののなかに入っていく」ものであり、そのためには、「しばしばほとんど『作者』を抹殺してしまうことで」とあると、安部公房は言っているのです。

ここから先は、オブジェということから、当時安部公房を捉えていたシュールレアリズムに言及して、山口誓子の俳句の持つこの第二の性格を論じていて、ほとんど自分の小説の方法を論じているに等しい論となっています。従い、安部公房は、俳句の余韻を、散文的に、従い論理的に、構造的に論じていること

になります。即ち、「それ（余韻）が情緒ではなくて、もっと深いもののなかに入っていく」、その深さをシュールレアリズムの考えを例示して論じているのです。

曰く、「解剖台とミシンと蝙蝠傘の邂逅」。

「この乾燥した無意味の発明」と同じものが、「誓子氏の句にしばしば見受けられる」といい、それは「グロテスクな情景」となっていると、安部公房はいます。山口誓子の第二番目の性格を備えた作品は、「意味よりもむしろオブジェとしての無意味によって成功している」と言っております。

この発言は、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』のノンセンス（無意味）の世界に邂逅し、『S・カルマ氏の犯罪』を書いて、芥川賞を受賞した安部公房の、当時の小説観を表しています。

安部公房は、山口誓子による俳句の作者の抹殺について更に述べ、この俳人が作者の抹殺ということの方法としては意識していないと言っています。そこにまだ不十分なところがあると言っているのです。このとき、既に安部公房は、10代のリルケやニーチェから存分に教わり自分のものとしていた、窪みに落下して、自己喪失を経験し、更にその窪みから脱出して、新たな次元に時間多層的な作品を生み出すということを考えていたに違いないのです。

この山口誓子論の最後の方を読みますと、当時この俳人は伝統的な俳句を否定し、その革新を主張していたのでしょ（全集第3巻、336ページ上段から下段へ）。

しかし、自己喪失を方法とし、既に20歳のときに『詩と詩人（意識と無意識）』という論文を書いて、自分の創作の方法論と方法を理論的に確立していた安部公房は、次のような言葉を山口誓子に贈っております。

俳句の世界で本当の叛逆をするということは、「『作者』の条件の無思想性に対する叛逆であるべきであり、そこに芸術への途があるのではないのでしょうか。そして、たとえば、誓子氏のオブジェの方法が、叛逆の一つの道ではないかと、私は考えたのでした。（略）ヨーロッパ近代が、自己否定の上に、今日

のリアリティの表現をかちとっていることを、われわれもまた日本の現実から発見しなければならないはずです。」

〔註3〕

この「無思想性」という言葉の使い方にも、晩年のクレオール論を思わせ、また、書かれざる、そうして書かれるべきであったアメリカ論の本質的なテーマの片鱗が反映しています。

安部公房の素晴らしいところは、当時世上を騒がせた桑原武夫の『第二芸術論』を引き合いに出して、俳句の形式を遵守することと自由律の俳句をつくることに関し、問題はそのような伝統的な形式とその否定の問題なのではなく、問題の所在は作者のあり方にあるのだと断じ、その作者の位置の持つ無思想性をこそ批判しなければ、言語表現の問題は解決しないと主張していることです。

こうしてみますと、作者の思想性が、即ち何を考えているのかということが、作者の未分化の実存に立って考えることであるという結論になり、それが後年の安部公房の芭蕉野暮論になっておりますので、同じ視線で山口誓子の俳句を振り返って眺めれば、山口誓子という俳人に、もっと野暮になれよと言ったことになるでしょう。

同じことを言うに当たっても、「未分化の実存」という10代半ばの、生硬な哲学用語を使った言い方から、平俗な野暮という言葉の選択に至る48歳までの、この30数年間に、安部公房の人間としての、また散文藝術家としての、成熟を思わずにはいられません。



もぐら通信の編集部員を募集します

編集部

新たにもぐら通信の編集者を募集致します。募集の要領は、次の通りです。

1. 募集人員

1名

2. 募集要件

- (1) 安部公房が好きであること。
- (2) 編集方針を大切に下さること（*）。
- (3) 無給であることを承知下さる事（逆に毎月2000円程度の持ち出しになります）。
- (4) 無償の奉仕ができること。

（*）【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。
2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。
3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。
4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

3. 編集部員の仕事

- (1) 校正、校閲、査読
- (2) 寄稿者とのコミュニケーション
- (3) もぐら通信を印刷し、配付（メール便等）する業務（掛かった費用は後日、各編集者が均等な負担金額になるように精算をします）
- (4) 原稿の執筆
- (5) その他のもぐら通信の編集と発行に関するすべての業務

4. 募集対象者

- (1) 年齢：不問
- (2) 性別：不問
- (3) 人種：不問。日本語が充分にできれば人種を問いません。
- (4) 住所：国内海外を問わず。

5. 要求される能力

- (1) PCのスキル：普通にPCが使えること。OSは不問とします。
- (2) アプリケーションのスキル：ワード、エクセル、OpenOfficeの初級程度の操作
- (3) もぐら通信を印刷し、配付すること。
- (4) 編集部の資産とも言うべきDropbox中の書類群を閲覧し、処理する権限を賦与されますので、相応に注意深く、思慮あること、常識あることが求められます。
- (5) 企画ができれば尚よし、です。

6. 応募先

- (1) 宛先：岩田
- (2) 電子メールアドレス：eiya.iwata@gmail.com
- (3) 件名欄に、「もぐら通信編集部員応募」とお書き下さい。

7. 面接

岩田（タクランケ）と岡（アレン）とでスカイプでの面接を行います。

8. 締め切り

必要な方が採用され次第、締め切ります。



[ご寄稿に際してのお願い]

編集部

いつも貴重なご寄稿をいただき、まことにありがとうございます。
まず今後の原稿締切日についてお知らせします。よろしくお願ひします。

22号 6/27(金) 23号 7/25(金) 24号 8/22(金)

さて、お届けいただきました原稿のその後の訂正につきましては、編集の都合上、次のようにお取り扱いさせていただきたく、ご了解のほどをお願い申し上げます。

- ・訂正事項を見出された場合、出来るだけ早くお知らせ下さい。
- ・編集上の初版が成った後での語句や表現の訂正依頼は、反映できないことがありますのでご了解下さい。
- ・しかし重要な事実誤認や錯誤の訂正については、可能な限りギリギリまで受け付けます。

以上、何とぞよろしくご協力をお願いします。

[前号訂正箇所]

第20号に誤植あり、次のように訂正を致します。

P24

「加齢なメンバーで十幾年か前に六本日」 → 「華麗なメンバーで十幾年か前に六本木」

P27

「Brooklyn Bridge」 → 「To Brooklyn Bridge」



読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。一部は要約させていただきました。

メール配信担当：岡篤史

滝口健一郎さんより

『もぐら通信20』
受領しました
ありがとうございます。

わたしの記事の、ゴシック体のフォントの大きさに驚きました。
真夜中、妄想・幻視したイメージ=あの写真の安部さんが、ユーモアたっぷりに話しかけてくるようでした。
ブレッソンの写真（安部さんのポートレート写真）には、なにか、特別に見るもののイメージネーションを刺激するような……

今号、読むのが楽しみです
また、ご連絡させていただきます。



内藤由直先生より

もぐら通信編集部御中

いつもありがとうございます。

友田さんの研究ノートや長与日記、興味深く拝読しました。

安部公房に関して、まだまだ新しい発見がありそうですね。

みなさまのご活躍に期待しております。

また次号も楽しみにしております。



感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んだの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思えます。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

【合評会】

第21号の合評会を近日中に、「もぐら通信掲示板」で開催します。<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs>

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、平野啓一郎様、宮西忠正様（新潮社）、富澤祥郎様（新潮社）、北川幹雄様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、日本近代文学館、
コロンビア大学東アジア図書館

【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。

2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。

3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。

4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房解読工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://w1allen.seesaa.net/article/396254167.html>

【もぐら通信のwiki】

「ニュース&記録」

<http://seesaawiki.jp/w6allen/>

「もぐら通信総目次・索引」

<http://seesaawiki.jp/w5allen/>



[第二版訂正箇所]

以下の箇所を訂正し、第二版を発行します。

今号の稲垣健さんの『安部公房の書棚 『鉛の夜』の闇』（9ページ）の記事の2ページ目にあるべき次の段落が欠落しておりましたので、第二版を発行し、補って、訂正しました。

「 帰りの地下鉄の窓外の薄闇を見ながら「ヤーンの表現力は天才的と言われるが、即物的で、安部公房に共通するところがあるのではないか」など、頭の中をいろいろな想念が駆け巡りつつ、一方で、地下鉄の走るゴーという音が、安部公房のあの「闇」の唸り声のように聞こえ、思わず耳を塞いでしまいました。」



編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

- 今号も小論を休載して、誠に申し訳ありません。
- 将棋では、羽生善治の名人復位。羽生挑戦者の非常に意欲的な差し回しが光ったシリーズでした。森内前名人には、過去何度も痛い目に遭っているだけに、ストレート奪取は予想外でした。羽生時代の再来です。中村太地などの若手の台頭が著しい中、4冠保持は驚異的。
- 囲碁では、伊田篤史がタイトル戦初出場。本因坊の井山裕太6冠とのフレッシュ対決。若手が台頭しないと、中韓には敵わない。
- サッカーの世界カップブラジル大会が開幕目前。ナショナリズムではなく、ニュートラルに、純粹に試合を楽しみたい。Japanese onlyではなく、For All peopleで！
- 勝負は、実力と時の運。手に汗握る熱戦の後は、ノーサイドで、気持ちよく終わりたいもの。
- ウクライナ情勢、南沙諸島領有権問題と、緊迫した政治情勢。ナショナリズムの衝動は抑えられないのか？盤上の争いは好きだが、銃を手にした殺し合いはまっぴらゴメンだ

[wlallen]

安部公房の場所 | ciya.iwata@gmail.com | www.abekobosplace.blogspot.jp

この歳でありますので、色々な薬を服用しているのですが、3月末にドイツに行って、ドイツ人の友人より譲り受けた薬箱が実に重宝しております。



月曜から日曜まで、朝・昼・夜・寝る前と、4つの区画に一日の服用の空間が分かれていて、実に使い易いのです。これと同じものを日本では見た事がありません。



[岩田英哉]



【編集後記】

今号は、荒木堅固さんという安部公房の警咳に接した最初期の愛読者、安部公房と親密な交流のあった方のご寄稿を仰ぎました。若い読者の方達に、当時の最初の読者の息吹が伝わることを念じております。また、安部公房邸の取り壊しは、誠に残念なことです。やはり荒木堅固さんの撮影された写真を掲載致して、読者の記憶に留めるためのよすがと致します。ここでも、荒木さんに感謝を申し上げます。稲垣さんの『鉛の夜』も、文学に深い造詣のある人間でなければ書けない文章だと拝察致しました。ご寄稿感謝致します。世は五月（さつき）も終り、六月に入りつつあります。紫陽花の便りもFacebookで見かけるようになりました。やがて梅雨の時季になり、それが終わるかどうかのころに次号を上梓することになるのでしょうか。あなたのご寄稿をお待ち致します。どんな短文でも結構ですので、安部公房についてのあなたご自身の言葉をお送り下さい。よろこんで掲載したいと思います。では、よき週末、よき6月を御過ごし下さい。

[岩田英哉]

もぐら通信編集部 連絡先: eiya.iwata@gmail.com

差出人:

廣安部公房

〒182-0003東京都調布市若葉町

「閉ざされた無限」

次号の原稿締切は6月27日（金）です。ご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 『けものたちは故郷をめざす』小論：wlallen
2. 安部公房のアメリカ論：岩田英哉
3. その他のご寄稿